

平成3年度科学研究費報告

——文明の起源をもとめて——

秋 山 進 午

1. 出発まで

平成2年度の文部省科学研究費（国際共同研究）は平成3年3月、中国側研究者一行3人が来日し、日本国内の関係資料や遺跡調査を行ない無事終了した。

平成3年度は、丁度2月から新たに、中国国家文物局から「考古涉外工作管理辦法」が公布され、それにもとずいて実施することとなった。事前に遼寧省側と打ち合わせ、今年度は、昨年、阜新胡頭溝墳墓群参観の帰途訪れた、保存良好な夏家店下層文化期の城址遺跡である阜新市化石戈郷南梁遺跡と、大連市金州区後石灰窯村王山頭積石塚の考古測量調査を実施することとして、国家文物局へ許可申請書を提出することとなった。しかし、なにしろ初めてのことであって、先例等が全く無い。懸命に書類を作成して、提出したのが5月の始め。幸い、8月に日本学術振興会の経費による内蒙古東部の調査を行なったので、その機会を利用して、国家文物局へ許可を促進して下さいようお願いを訪れた。

昨年、第一次調査の前に国家文物局を訪問したときの副局長は黄景略先生であったが、今年は交替されて新たに張柏先生が副局長になられた。その折はご不在でお会いできず、外事処の宋処長と文物処李処長・王副処長にお会いしたが、人事異動があったため、申請は届いているが、これから審議することになるとのこと。実施まで十分な日数がなく、ともかく審査の促進をお願いして帰国したのであった。帰国後、私も伝手を頼って中国側に働き懸けたり、遼寧省とも連絡を密にしながら準備を進めていたが、ギリギリになって、正式許可書は遅れるが、調査は実施してよいとの連絡が遼寧省側にあったとのことで、ようやく実施に踏み切った。

許可を得る迄には、遼寧省の郭先生はじめ皆さんの、日中共同研究を成功させようとの熱意が大きな力となったものと思うが、おそらく加えて、考古学界の指導的立場の先生方の様々なご支援があったのではないかと想像している。ともかく、実現までには、

ずいぶんはらはらしたが、今年になって国家文物局長張徳勤先生のサインの入った正式許可証が送られてきた。我々の日中国際共同研究も晴れて認知されたもので、喜びに堪えないところである。我々の共同研究をご支援頂いた国家文物局の各位、種々ご高配を賜わった中国考古学界の諸先生に深甚の感謝を申し上げる。

平成3年度の日本側陣容は、昨年通りとしたかったが、奈良国立文化財研究所の伊東太作氏が公務と重なって出張できず、代わって東大の大貫静夫氏にお願いした。一行はつぎの通りである。

日本側団長	大手前女子大学文学部教授	秋山 進午
日本側団員	九州大学文学部助教授	岡村 秀典
日本側団員	愛媛大学法文学部助教授	宮本 一夫
日本側団員	東京大学文学部助手	大貫 静夫
日本側団員	財泉屋博古館学芸員	広川 守

考古測量のベテラン伊東氏が不参加となったのは残念であるが、出発前に測量器材の取り扱いを広川氏に伝授して頂いた。お陰で、無事測量調査を行なうことが出来たことを伊東氏にお礼申し上げます。こうして、事前準備を行ない、必要器材等を準備して、いよいよ平成3年度の調査に出発することとなった。

平成3年度は考古測量に重点をおき、二箇所を予定した。一箇所は昨年度に訪れた遺跡で、保存状況が非常に良く、夏家店下層文化期の典型的な城跡測量となろう。もう一箇所は大連市北郊の積石塚である。こちらは何も資料がない。しかし積石塚は、実はこの日中共同研究のそもそものはじめが、四平山積石塚の考古測量を企図したところから始まったのである。その後の中国国内事情の変化によって、四平山一帯が外国人の立ち入り禁止地帯となってしまったため、実施不能となったままである。したがって、今回、積石塚の測量を行なうこととなったのは、当初計画を補う意味で適切な選択となる。

積石塚について、我々は写真や測量図からしかの知識しかない。これからも四平山の測量をあきらめないでいるつもりであるが、そのためにも今回の測量は良い準備調査となろう。

また、丁度、滞在中に山東省済南市において「城子崖遺跡発掘60年記念学術討論会」が開催される。我々がかねてから遼東半島との関係において、その対岸の山東半島の新石器時代の様相に注目してきた。この討論会を機会に、山東半島を参観してその様相を直接見聞することを計画した。このため、中国滞在日数が40日の予定となった。

2. 中国における日本側調査

9月28日（土）曇後晴

前夜、打合せや荷物振分けのため、福岡市内のホテルに集結するはずのところ、台風の来襲を受け、京都から同行した秋山と広川は新幹線が広島で打切りとなり、止むなく広島泊まりとなる。自分たちの荷物のほか、測距儀の大きな荷物を抱え、おまけに夜中の3時まで停電と、台風による建物の震動で眠られず、翌朝、やっと動いた列車にのって11時過ぎ、博多着。大貫氏も東京からの新幹線が動かず、東京で足留め、朝の飛行機で板付着。岡村氏も鹿児島本線列車が動かず、やっと12時前博多着。なんとか無事集結して出発となる。

岡村夫人と坊やの見送りを受け、中国民航機に乗り込み、15時40分離陸。九州横断は台風一過、快晴となる。五島列島を離れてしばらく、機の右手に大きい島影見える。濟州島らしい。

中国時間17時45分大連周水子空港着。案の定、測距儀が税関に引っ掛かったが、持ち込み器材表に記入することで無事通過。郭大順先生、辛占山先生ら、それに北京から先着の宮本氏に出迎えて頂き、真新しいマイクロバスにて大連賓館へ。夜、大連市文化局の李雅主任の招宴にあずかる。蟹など海の幸が一杯の食事は大連ならではのもの。

9月29日（日）晴後曇

8時ホテル発。大連—瀋陽高速道路にて遼東半島を北上、普蘭店から黄海沿いに東へ向かい、北朝鮮との国境の町丹東を目指す。孫・辛先生が同行される。11時庄河通過、12時大洋河沿いの孤山賓館にて昼食。ここでも蟹を山盛り頂く。

14時過ぎ出発、15時30分后窪遺跡着、春に火傷で入院された孫守道先生に替わって来日された、許玉林先生が待っていてくださった。この遺跡は許先生が調査にあたられ、遼寧東部の新石器時代標式遺跡となったところである。立派な収蔵整理庫があり、その中で出土した資料を拝見した。遺跡は1500平方米発掘され、今は埋め戻されて広場となっているが、全体が周囲より10m程高い台地となり、その上に遺跡が営まれていた。現在水田が広がる東側は、当時は海が入り込んでいたものと推定されている。17時過ぎ遺跡発、19時丹東の鴨緑江大厦到着、丹東市文化局長肖勉氏の招宴、ここでも蟹のご馳走にあずかる。

9月30日（月）曇後晴

折角、丹東へ来たのだから、と鴨緑江の見学のため7時30分ホテル発、国門公園で初めて鴨緑江と対面。川幅広く、豊かな水がゆったりと流れる。川向こうは北朝鮮。こちら側に比べ、建物も疎らで実に静かである。国境を跨ぐ鉄橋がそびえる。僅か下流にもう一本鉄橋が架かっているが、中央で切れている。1909年、満州鉄道が架けたもので全長944m、単線の鉄道橋で、中国側から5番目の橋梁が回転して大型の船を通す構造にな

っていたが、朝鮮戦争のとき、1950年米軍機によって破壊されたままとなっている。現在は“鴨緑江断橋”として丹東市の文化財となっている。

一旦、ホテルへ戻り、肖局長らの見送りを頂き、9時出発。北へ本溪市を目指し、遼寧東部の山地地帯に入る。山がちで小さな盆地が続く一帯は、山には灌木が茂り緑豊かで、小河川がいく筋も走り、日本の農村ときわめて近い風景である。途中では鳳城鎮がいくぶん大きく、周辺に漢や高句麗の城跡があるとのことである。^(補記1)

13時過ぎ、本溪市着。本溪市文化局副局長常連学氏と、本溪市博物館長魏海波氏と昼食を共にする。14時過ぎから文化局の2階に特別に展示して頂いた本溪市周辺資料を調査する。本溪県富楼郷劉家哨村出土の、外区に絡縄文帯、内区に水禽文帯をもった双鈕鏡と、青銅製の特有の形態の鞘を伴い後期のT字形劍柄を着けた青銅短劍のセットは最近正式報告がされた(『考古』1992-4)。本溪梁家出土の多鈕粗文鏡と青銅短劍のセットも『遼寧文物』第6期(1984年)に報告されている。共に、遼寧省東部地域の青銅器時代文化の重要遺品である。その外、多数の青銅短劍や土器類を並べて頂き、大きな収穫があった。

16時30分本溪市発、瀋陽へ向かい18時、東北工学院のなかの東栄大厦に入る。夜には郭・孫・辛先生に文化庁の姜念思先生がこられ、以後の日程打合せを行なった。

10月1日(火)晴後曇、一時夕立

今日は国慶節で休日のはず。しかし、余り町の様子は変わらない。8時半発、北の鉄嶺市へ向かう。10時半着。博物館は「周恩来同志少年時讀書旧址」に併設されている。周総理が少年時代に遼寧省にいたことがあるとは知らなかった。ここの目的は法庫県湾柳街出土品である(『北方文物』1988-2、『考古』1989-12、『遼海文物学刊』1990-1)。高台山上層式の夏家店上層文化土器と青銅製の盃内斧・鹿頭や鈴付の刀子・斧・斧先・鏡形円盤等からなる興味深い一群である。

12時、群衆芸術館に移動し、一室で康平県順山屯遺跡出土品をみた(『遼海文物学刊』1988-1・2)。これも高台山上層式の一群であり、大小の鼎と壺と鉢からなる。他に紡錘車、石斧、卜骨もあった。14時出発、夕立の後を湾柳街遺跡の現地を訪れた。煉瓦工場の一角に位置するが、今は詳しい様子は不明である。

10月2日(水)曇後晴

遼陽博物館への見学日であるが、体調悪く休養してしまった。

10月3日(木)晴

8時30分発。10時、撫順博物館着。立派な博物館建物に豊富な資料によって、撫順市

管内の歴史陳列がされている。

古いほうから、先ず新賓県東升洞窟遺跡の出土品。磨製の石斧・石のみ、粗陶双耳壺に加え、釉薬のかかった壺が珍しい。はたして同時代のものか。

望花遺跡の青銅環首刀子は、殷墟小屯にある古いタイプのもの。施家東山の磨製石斧、磨石、石皿に青銅刀子、清源県三家郷李家堡子の青銅矛、同小家堡の青銅環状斧、石門嶺1号石棺墓出土の青銅斧、新賓県永陵公社色家石棺墓の青銅刀子（『遼寧文物』第6期、1984年）、新賓県趙家出土の石製斧鑄型等、一部は簡単な報告があるものの、初めて見るものが多く、見学に時間を忘れた。

これで、今回の調査の眼目の一つであった遼寧東部地区の出土品を、丹東后窪はじめ、本溪・鉄嶺・遼陽・撫順の各地で見ることが出来た。この地域は総じて、これまで発表されたものが少なく、初めて、その全体の様相をおぼろげながら、つかむことが出来た。遼寧省東部の山岳地帯は、そのまま、吉林省東部、北朝鮮へと続いており、遼寧省中部以西とは異なる文化圏を形成している。今回の調査はその手始めで、今後もっともっと研究を深めなければならない地域である。かなり豊富な資料の有ることが判ったが、偶然の発見によるものが多く、きちんとした発掘調査の行なわれたものが少ない。そこらにこの地域の研究上の隘路があることも痛感させられたところである。

昼食後、13時17分、撫順発、瀋陽に向かう。道路左右の稲田は、黄金の稔りの収穫中である。14時50分、遼寧省博物館で体制を整え、一路遼西の阜新へ向かう。今回の調査の大きな目標の一つ、南梁遺跡の考古測量調査が始まるのである。

230軒を一気に走り、18時40分阜新的の宿舎、西山賓館に着く。夜、阜新市の馬副市長の招宴。昨年もお世話になった馬副市長は、今年もお元気である。特に、昨年から今年にかけて、阜新的の査海遺跡の再調査が行なわれ、住居址が見つかったほか、玉製の塊状耳飾や土器片に描かれた龍形の画像が発見された。遺跡の放射性炭素年代が約紀元前5900年となって、したがって、是等の玉製品や龍形が中国で最も古い遺品となったのである。丁度、我々が訪れたときは、その発見を記念して特別展が開かれており、町のあちこちに、“中国最古の玉と龍”記念ステッカーが貼りだされ、お祭り騒ぎとなっていたところなのである。古い文化に事欠かない中国でも、最古の玉器や龍形が見つかったとなれば、町興しの絶好の材料であろう。昨年も完全に圧倒された、馬副市長の気炎が、今年は一層上がっていたのも無理はない所である。同席された郭先生によると、すでに、査海遺跡の近辺に博物館の建設が具体化されているとのこと。周囲の市に比べ、これまで古代遺跡に乏しかった阜新市が、査海遺跡にかける意気込みが解ろうというものである。^{（補記2）}幸い帰国直後に、略報告の掲載された『遼海文物学刊』1991年第1期が届いたので、現地の見聞と併せて紹介したい。

10月4日（金）快晴

8時50分発、査海遺跡出土品展見学に向かう。会場はマスコミが詰め掛け、我々の見学風景を地元のテレビが追っ掛ける。委細構わず、我々は初めて見る査海遺跡の出土品の検討にはいる。

これまで、この地域で最も古い文化は、内蒙古敖漢旗興隆窪遺跡発見の興隆窪文化である（『考古』1985—10）。放射性炭素測定年代で、紀元前5800年の古さをもつ。その遺跡の様相と比べて、土器の作りが厚手で焼成温度が低く、脆いこと。器形が平底で上部が余り開かない筒形の、いわゆる深鉢と、背の低い浅鉢しかないこと。文様がジグザク文や直線を組合せた幾何学文であることなどは興隆窪遺跡と査海遺跡とは共通している。また、石器は腰のくびれた大型の打製鋏を主体とし、細石器を伴うこと。磨製の石器に石斧があり、磨石と石皿があること、なども共通している。

土器の文様に査海遺跡では、ジグザク文のほか刺突文が多いことは、興隆窪文化の土器とは異なるところであるし、打製の大型石器に両側から穴を開けたものがあるのも興隆窪の石器に見られないところである。そして、何よりも、興隆窪と異なるのは、玉器が発見されたことであろう。このことは、一昨年の環渤海考古学会のおり、発掘にあたった方殿春氏が紹介していたが、これほど様々な玉器があるとは思わなかった。ケースの外からの観察であるが、玉質は薄い象牙色で、全体に細かい灰色の斑点がごまのように混じって見える。瑛状耳飾は全部で3個が展示されていた。2個は通常の形であるが、1個は厚みのある瑛状柱状玉とでも呼ぶべき変わった形である。

思うに、この柱状玉は瑛状耳飾の半成品ではなかろうか。瑛を造るのに、先に切り欠き部を加工した瑛状柱状品をこしらえ、それを輪切りにしてから環状に仕上げたものとする。そうすると、河姆渡出土の瑛が環を造ってから瑛部を切りかいたのとは製作技法が大きく異なることとなり、両者がそれぞれ別に起源を持つことを証明する資料となる。

このほかに、一端に穴があき、先端が細長い匙状になった玉器が長短各種ある。後に大汶口文化や良渚文化にある、錐状玉器とよばれる首飾りと同類のものに違いない。また玉ののみが1点ある。匙状首飾りは墓の被葬者が身に付けていたと報告されている。興隆窪遺跡では住居址のみが発掘されていて、墓地は発掘されていない。^(補記3)今後、興隆窪文化の墓地が発掘されたとき初めて、両遺跡の個々の様相を比較できることとなろう。

もう一つの龍形は土器の表面に彫り表されたものであった。断片となっているため器形は明らかではない。厚手であることと、土器のカーブからみてかなり大型の土器に施されたものらしい。土器片は2片あり、かなり幅広の帯状に曲線が彫られ、そこに2～4段、鱗状の刺突圧痕があった。龍とはいわれるが頭部も尾部も未発見である。今後の精査を期待したい。

10時、展示場を出て査海遺跡の現地へ向かう。遺跡は阜新市の東北約50軒の阜新県沙拉郷にある。阜新から瀋陽への国道を北へ進んでから川沿いに西へ、さらに右へ山間に入る。10時47分遺跡着。北にある山から南へ緩やかに下る斜面の中程が盆地状になり、遺跡はその中にある。遺跡は南側に激しい雨水で出来た断崖の部分に暴露して発見されたものである。発掘面積は1,800平方メートルで、そこに13基の住居址があった。これらの住居址は整然と配されているようであるが、同様の住居址の配置状況は、先に報告された興隆窪遺跡でも見られるところである。ほかに子供の墓1基が住居址中にあり、そこから先述の大小各3本ずつ玉の匙状器が胸飾として出土している。

丁度、中国遼寧電視台と共同で「中国遼河を行く」番組作成のため遼寧省取材中の富山テレビに現地で取材をうけた。この遺跡に展示館が建設される予定であるとのことである。遺跡の保護顕彰はわが国でもなかなか大変な事業である。無事成功を祈りたい。午後は明日からの南梁城子山の考古測量調査の準備を行なった。

10月5日—10月9日、阜新市南梁城子山考古測量調査。

測量期間中は天気は概ね良好で、5日夕方に小雨がぱらついた程度であった。遺跡があるのは遼寧省西部、阜新市の西北で、内蒙古高原から流れ下る牝牛河の流域にある。もう20軒ほど河を遡ると内蒙古となる。それだけに、阜新市からは車で約1時間40分はかかる。不便でもいいから遺跡の近くに滞在したいと申し入れていたが、結局阜新市から往復し、昼食は現地ですることとなった。その代わり、私がこの遼寧省西部で最も気に入っている紫都台付近の景色を朝夕眺められた。

遺跡へは阜新市から西へ国道101号線を1時間程走り、そこから地方道へ入る。半ば干上がった川床に沿って約25分走り、化石戈壁へ着く。ここからはでこぼこの農道を15分は走ると、右手に天辺が平らな丘が見える。遠くからでも城跡が遠望されるところから城子山の名が付けられたところは、昨年測量調査した凌源三官甸子城子山と同様である。道は急角度で牝牛河の支流の一つ、下新丘河の川床へ下る。この河の開析した断崖の両側に、河の名をとった下新丘村がある。戸数60戸、人口は300人程の村である。

この村から見上げるような高さに遺跡がある。村と遺跡との比高差は約50m。村の南にある南梁と呼ばれる東西に細長い尾根の中腹が、平らとなった所に城が造られた。

遺跡は東西約160m、南北約200mほどの隅丸長方形に近い。東面は3m程の高さに城壁が聳え、東に続く尾根を遮断している。北面と西面は低い城壁が回り、その外側は断崖である。南面のみが斜面が緩く、ここが当時も出入口であろう。城壁が約20m程内側に引っ込み、門を思わせる。城内は未発掘で、土器片が散布しているのみである。一部に段があり、南部と北部に分かれている。遺跡の北は深い谷を隔てて鶏冠山が聳える。頂上が鶏冠形の岩山である。その麓一帯にも夏家店下層・上層文化の土器が各所に散布

している。

遺跡からは南に牝牛河の雄大な流れがきらめいて望める。ここからは見えないが、北に河を遡ると、玉器を出土した胡頭溝墓地がある。はるかに内蒙古高原の山並みが霞んで見える。今年の凌源城子山もそうであったが、ここは更に奥地である。深い静寂の中での調査である。

考古測量調査も2年目に入り、去年の経験を踏まえ、日中の共同調査も息が合ってきた。今年も2班編成で測量を行ない、天候にも恵まれて予定どおりに終了することが出来た。

9日の午前中は胡頭溝墓地を再訪した。また、昨年同様基準杭を埋設した。阜新市最後の夜には、馬副市長が送別宴を開いてくださった。

10月10日（木）霧後晴

一面の霧の中を阜新を後にする。国道101号線を瀋陽に向かう。東北へ約60軒で塔營子に着く。遼代の懿州城址である。当時の城壁の一部と磚塔が残っている。塔は八角形磚積みで、天辺が破損しているがもとは13重であったろう。あちこちが傷んだままで放置されているが、築造の様子をかえって良く窺うことが出来る。各面の大きい仏像が、他の部分と同じ小磚を、仏像の形に合わせてでこぼこさせ、その角を滑らかにしたうえで全体に漆喰を塗って彩色した状況が良くわかる。再び瀋陽に向かい13時遼寧省博物館着。郭先生らに迎えられる。昼食休憩後、瀋陽北駅16時45分発青島行直快に乗車。

10月11日—10月25日、山東省各地参観。

この間は、遼東半島の新石器時代との関連で是非検討が必要な、山東省各地の参観を行なったが、紙幅の関係もあり、その報告は別途記述することとしたい。

10月26日（土）晴後曇、小雨降り風寒し。

昨夜、烟台から大連行きの連絡船に乗った。午前3時50分起床、4時30分下船。まだ真っ暗ななか、辛先生らが波止場まで出迎えてくださる。一旦ホテルへ入り休息。午前、宿舎にて今後の調査日程打ち合せ。午後さっそく、今回の二度目の考古測量調査予定地である大連市金州区後石灰窯村の王山頭積石塚群現地へ行く。金州（金県）の宿舎から車で30分程と近い。後石灰窯村は金州湾の北の先端にある。村は名前の石灰石採掘のほか農業と漁業の両方の部落が合体し、高収益をあげるモデル企業体村として有名だそうで、なる程、家々は1軒残らず100平方メートル以上の2階建てばかりである。見学者用の食堂があり、昼食はそこで頂くこととなる。ときどき渤海産の蟹もでた。

10月27日（日）曇時々晴

今日は丁度遼寧省文物考古研究所と吉林大学が調査を行なっている、廟山の遺跡を見学することとなる。^(補記4)後石灰窯村の更に北で、宿舎から1時間余りで老虎山村につく。廟山は村の東北に聳える。先ず南麓の発掘現場をみる。東西20m、南北5mのトレンチが掘られ、住居址3基が発掘されていた。トレンチ断面に双砵子1期と3期の層位がみられた。そこから廟山を登る。山腹に、もう1基、半ば以上破壊された住居址があった。さらに山頂を目指す。山頂には巨石を組み合わせた支石墓と積石塚が、1基ずつ築かれていた。支石墓は支石を抜かれて大きく傾き、積石塚も破壊が著しく、ようやく長方形の墓室が残るが、共に詳細は明らかでない。

午後、もう一度現地を訪れ、今度は廟山の南の、低い丘陵の上にある積石塚の発掘現場を参観した。廟山から南へ、低く突き出した丘陵上のこの遺跡は、土龍積石塚群と呼ばれる。北から1号、2号、3号と、少なくとも3地点の積石塚が確認されている。その中の、1号積石塚を発掘中であった。

写真や図面を見たことはあるが、実際の積石塚を見るのは今回が初めてである。昨日、王山頭で上部構造を初めてみた。今日は積石を除いた下部構造を初めてみた。底に板石を敷き、周囲を塊石で長方形に囲んでいる。大きさは人ひとりが丁度入る大きさである。棺内に人骨片や土器片の残存している状況が見えた。まだ完掘されていないが、この棺の周囲を囲んで長方形の石囲いがあり、それを1区画として、何区画かが左右に繋がっている様子が良くわかった。

そのあと、吉林大の宿舎で廟山発掘の出土品を見ることが出来た。中に、明日から測量を予定している王山頭積石塚のうちの7号墓出土の土器片があったのには驚いた。聞くと、遼寧省文物考古研究所と吉林大がこの春、試掘を行なったものということである。今の所、我々が出来るのは測量調査が精一杯である。我々が中国で発掘を行なうには、まだ条件が充分熟しているとは思えない。まだ色々と越えなければならない、困難な壁が聳えているように思える。しかし、今、共同で測量を行なおうという矢先に、試掘とはいえ、先を越されるのは、正直いって良い気持ちがないのは止むを得なからう。我々が、中国の人に既得権を主張することは、出来る相談ではないが、せめて測量の終わった後からにしてほしかったというのが、いつわらざる心境である。

10月28日—10月31日、大連市王山頭積石塚群考古測量調査。

王山頭は金州湾の北の端に位置する。現在は陸続きであるが、かつては独立した島であったろう。王山頭は南北約500m、東西約200mの繭形岩山で、高さは約45m。今、全山禿げ山となっている。東から見ると、海に面した南端は現在、漁港となって波止場が設けられている。南東部は石灰岩採取の為、大きく抉り取られている。岩山上の積石塚

はその南端の断崖のすぐ傍から始まり、そこから北へ、ほぼ尾根筋に沿って築かれている。一番南を1号とし、順次北へ番号を付けたが、丁度尾根のピークにあたる、3号、4号、6号が一段と大きく、石が高く積み重ねられており、周囲からでもはっきりと見える。

登ってみると、4号と6号との間にある5号はすでに早く掘り荒され、石室が露出していたし、7号は先述の通り、我々の共同調査の直前に試掘されて、すでに石室床面があらわれていた。現地で孫先生を中心に地表の精査を行なったところ、方形の区画がつぎつぎと見つかり、結局、13基の積石塚が築かれていることが明らかとなった。

測量は日中共同でここでも2班編成により実施した。木らしい木が1本も無い秃げ山であるため、測量は順調であったが、海に面した島状の岩山であるため、何時も風が強く、猛烈な寒気に悩まされた。

積石塚の石材はこの岩山のものを使っている。尾根のピークに位置する三つの積石塚は、周囲からもはっきり認められるごとく、2m前後の高さまで石を積み上げているが、果たしてこれが当初からの構造であったかは大いに疑問である。孫先生は積石の1m程の高さの所に円形に回る石組みを見つけた。それが確実に当初からの構造なら初めての発見となるが、そうした積石塚の上部構造については、なお本格的な今後の精査に待つ必要がある。同時に、現在地表面に方形や長方形の区画があらわれているのは、すでに天井部の積石を失っているのであろう。あるいは、南端にある1、2号のように、地表に僅かな高まりをもった形のもので築造当初の様相を良く留めているものであろうか。測量調査のみではあるが、積石塚初体験は様々な感想を抱かせてくれた。

11月1日（金）晴

王山頭の測量を無事終了して、この日は亮甲店支石墓の見学に向かう。先に、金州区杏樹林鎮杏林村大溝頭遺跡を見た。双砵子2、3期の住居址が発掘されたそうであるが、現状では明確でない。深く切れ込んだ崖面に多数の土器片が散布している所を見学した。その後、亮甲店へ向かう。亮甲店の町並みを過ぎて車が停まったところから、東の丘の稜線に支石墓が聳えているのがはっきり望める。さらに農道を1軒程登り、あと徒歩で近付く。側へ寄ると下から遠望したとき感じた程には大きくない。これは亮甲店の小石棚（支石墓のこと）とよばれ、ここから北へ約2軒ほどに大石棚があったが、破壊されてしまったとのこと。この小石棚も南の側石が壊されて横倒しになり、そのため天井石が大きく傾いている。天井石は東西445cm、南北305cmあるが、これも先端が割り取られている。室内の内法は283×230cm。北方式支石墓を見るのは昨年の営口県石棚山のものについて二つ目である。前のときもそうであったが、天井石を支える四方の支石は決して自然石ではなく、一定の厚さと形状になるよう、明らかな加工痕がある。現在は良

く開墾された尾根の上にあるため遠望できるが、築造当時はどのような景観であったろうか。

宿舎へ帰り、昼食のあと金州博物館を見学する。亮甲店の支石墓から遠望した向応郷老鷄山や、七頂上山郷東山の新石器時代遺跡の出土品や発掘状況写真に興味があった。

今回の金州での共同調査には、大連市文物調査研究員の許明綱先生が終始同行くださった。また金州博物館の張館長始め、館の皆さんには大いにお世話になった。夜には大連市文化局李先生による送別宴をはって頂いた。各位に厚くお礼申し上げる。

11月2日（土）曇

金州発、瀋陽大連高速道路で4時間、瀋陽の宿舎へ着く。午後休養、瀋陽市内を散歩、もう初冬で寒さを感じる。夜、郭・孫・辛先生に姜先生が顔を揃え会食のあとミーティング、これからの共同研究の進め方を話し合う。

11月3日（日）晴

午前、昨夜の引続きで今後の進め方、とりわけ、共同研究の報告書をどうまとめるかで話し合い続行。午後、南梁城子山の遺物実測。夜、21時35分発北京行き特快に乗車。

11月4日（月）晴

北京着、考古研究所の張子明先生が駅まで出迎えてくださる。宿舎で休息のあと考古研究所へ。徐萃芳所長はじめ考古所諸先生にお会いし、今回の共同研究の概要報告や今後の共同研究について懇談。そのあと、夏に日本学術振興会の国際共同研究で内蒙古東部の調査に終始同行頂いた劉晋祥先生を考古所内蒙古研究室にお訪ねした。劉観民・楊虎・王巍先生にも歓迎して頂き、整理中の内蒙古敖漢旗大甸子遺跡出土品などを拝見し、種々意見を交換するなど、実りの多い一刻を過ごすことが出来た。午後、故宮博物院へ、丁度開催中の耀州窯特別展をゆっくりみる。唐代の創業から現在まで続く各時代の製品が陳べられていた。宋代の範が残っており、当時の窯が復元されているとのこと、鑑別はどうなるのであろうか。出口で売っていた宋代の劃文壺の写しを土産に購入した。

11月5日（火）曇

午前、瑠璃廠で本を漁る。午後、北京市文物研究所を訪ねる。齊心所長、靳楓毅副所長とも、去年の延慶山戎墓葬陳列館見学で、お世話になったところである。応接室に、その延慶県発掘の資料を一杯並べてくださった。ノートをとるやら、いろいろ議論するやら、あっという間に時間がたった。再会を念じつつ見学を終えた。

11月6日（水）曇

午前、国家文物局に張柏副局長を訪問、今回の調査の報告を行なう。引続き外事処長宋先生、考文物処副処長王先生、それに考古所の張子明先生を交え、昼食を共にしながら今後の共同研究についての中国側の見解をうかがうことが出来た。午後、歴史博物館見学、何度みても色々勉強になる。展示も少しずつ変わっている。時間一杯見学する。

11月7日（木）晴

午前、休養と荷物整理。昼食後、宿舎発、空港へ。郭・孫・辛諸先生、それに考古所張子明先生も見送りにきてくださる。15時北京発 JL786便にて大阪空港へ。

平成3年度の日本側調査は、間に山東省参観を含み、40日にわたった。共同研究者各位の参加を承認頂いた各所属長にご協力感謝申し上げる。

文末となったが、中国での滞在と見学にあたって、共同研究機関の遼寧省文物考古研究所郭・孫・辛先生始め、一々お名前を記さないが、お世話になった各地の博物館、文化担当部門の皆様は厚くお礼を申し上げたい。共同研究の指導にあたられた国家文物局張柏副局長ほか担当各位、考古研究所徐萃芳所長始め諸先生、北京での滞在にお世話くださった張子明先生らにもお礼申し述べる次第である。

（補記1） この鳳城県には平成4年度の共同研究で考古測量を行なった草河郷東山遺跡、戦国末から前漢初期に至る劉家堡遺跡などがある。

（補記2） この査海遺跡博物館は平成4年9月に開館し、我々も平成4年度の共同研究の折見学した。

（補記3） 平成4年度の共同研究の折、郭大順先生から、最近興隆窪遺跡の再発掘調査が行なわれ、査海遺跡と同様に住居址内部に墓が設けられ、玉塊が出土したことを教授頂いた。

（補記4） 廟山の報告は『遼海文物学刊』1992-1に報告がされた。